

様式 1

研究報告書（平成 25 年度）

提出者 中 島 満 大

提出年月日 2014 年 3 月 31 日

**【本ユニットにおける研究テーマ】**

和文 人口変動と家族形成に関する歴史人口学的研究

英文 Historical demographic studies of population changes and family formation

**【研究のねらいと目的】** (600 字程度)

本研究は、前近代社会から近代社会へと移行していく過程において、人口や家族のあり方を、村落に暮らす人びとの視点から考察し、その変動と持続を析出していくことを目的としている。本研究のねらいは、それぞれの地域が横断的に、また一様に人口や家族の近代化を経験していたわけではないことを示す点にある。そして本研究がまず対象とするのは、日本社会における西南地方の村落である。西南日本村落を対象とする理由は、これまでの歴史人口学的研究が東日本・中央日本に多く分布しているため、西南日本村落を研究することで、更なる前近代社会の地域的多様性を確認すると同時に、東西に広がる地域的多様性がいかにして近代化とともに変容していたのかを解明できるからである。さらに将来的に本研究は、日本社会だけでなく、東アジアをもその対象とし、比較研究として統合していく予定である。

**【研究業績】** 学会報告・論文など

中島満大「近世海村における出生コントロールと子どもの再分配」  
第 64 回関西社会学会、大谷大学、2013 年 5 月

中島満大「人口変動・性比の転換・結婚力—近世後期海村を事例として」  
第 65 回日本人口学会、札幌市立大学、2013 年 6 月

### 【成果の概要】（800字程度）

今年度の本研究の成果は、以下の2点になる。まず第1の成果は、歴史人口学が提示した西南日本村落の特徴の修正である。これまで歴史人口学では、徳川社会における西南日本村落の特徴として、「人口増加」「高い出生力」「高い平均初婚年齢」「婚外出生の多さ」などが挙げられていた。こうした特徴は、主に肥前国彼杵郡野母村（そのきぐん・のもむら）の史料から導き出されてきた。本研究も同じく野母村の史料・データを用い、時系列的变化に着目し、分析を行ったところ、いわゆる19世紀初頭から中葉にかけての「人口増加」期は、これまで言及されていた特徴に当てはまる点が多かったが、それ以外の人口停滞期には異なる野母村の特徴が顕在化していた。たとえば、18世紀後半においては、長男と次三男以降の者たちとの間で婚姻率に差があり、長男の方がより結婚していた。つまり、この時期には、ある程度、長男が優先的に結婚していた。他方、次三男以降の者たちは、結婚できない人生をも覚悟する必要があった。こうした結婚による統制が19世紀に入り、緩和されることで先に特徴として挙げられていた「高い出生力」や「人口増加」を野母村では達成していたことを本研究は明らかにした。

続いて第2の成果は、これまで地域性の文脈で議論されてこなかった行動に関して、新たなフレームワークを提示したことである。徳川社会における結婚年齢の「西高東低」パターンは広く知られているが、離婚の地域性に関してはあまり関心が払われてこなかった。本研究では、離婚の「東高西低」パターンを発見し、こうした地域性が結婚形態の差によるものではないかとの見解を提示した。

このように本年度は、徳川社会における人口と家族の地域性について、新たな知見を付け加えた。これらの知見は、日本社会の近代化に関する考察への貢献だけでなく、今後の東アジアを含めた比較研究への地平を切り開くものであると言える。

### 【通信欄】